

# 2173再構築 17

4ヶセド：慈悲

エリー

4 ケセド:慈悲

<調べた言葉>

じひ〔慈悲〕

ちえ〔智慧〕

いつくしむ〔慈しむ〕

なさけ〔情け〕

おもいやり〔思い遣り〕

たちば〔立場〕

きもち〔気持ち〕

ちい〔地位〕

じょうきょう〔状況〕

めんぼく〔面目〕

ゆるす〔許す・赦す・聴す〕

その人自身の言動に関係なく、生まれや育ちで拒否された状態を「差別」というとしよう。

そういう差別は、する人もいれば、しない人もいる。

だから、差別しない人との出会いで、チャンスをつかんで、信頼関係を築き、居場所ができることはある。

本当の姿がよいものだから、時間とともに誤解がとけて、受け入れられていく。

では、本当の姿が、悪いものだったなら？

仲間と思わず、敵対者とみなして、災いがふりかからないようにするのが一般的な対応だと思う。

関わりを積極的に切ってしまう。

そこで切らずに、手を差し伸べ続ける人物に対して、「慈悲深い」という言葉を思い浮かべる。

-----

たとえば、それが本人の行いに関係なく起きる、伝染病だったなら？

看護は命がけの仕事になる。

うつらないように最新の注意を払いつつ、回復を信じて治療をし続ける姿を見て、慈悲深いと感じられる。

自分が同じ立場になって、手当もないままに隔離されたら嫌だと思うが、看護をしようとは思わない。

看護の仕方を知らないし、それだけの体力もない。

ただ、遠くから回復を祈るだけで、逃げたと言われても仕方ない対応をとるだろう。

-----

では、盗みや暴力だったならどうだろう？

叡智のところでも出てくるけど、悪い状態を続けさせることは、慈悲ではない。

「悪い」と言い通す「強さ」が求められる。

暴力に抵抗できない弱い人間が、暴力をふるう人間を悔い改めさせて、慈悲を与えることは不可能だ。

引き離して守ることが求められる。

「盗んで何が悪い！」と言い張る相手に、隠し場所を教えなくて、守ることも正しいことだと思う。

場合によっては、追い出すことも考えられる。

では、口では「反省しています。もうしません」と言っているのに、何度も何度も悪事を繰り返す場合はどうだろう？

「無条件に信じて、毎回だまされる」は、慈悲とは言わないだろう。

あるいは、根負けして、改心するかもしれないが、その間の被害を考えたら、最悪な選択だと思う。

次こそは、次こそは、信じ続けて、怒りを爆発して「切る」くらいなら、最初から切ってしまった方が被害がない分、よいのではないかと思う。

たぶん、「本当に改心したのか」と疑う目と、「今度こそ大丈夫」と未来を信じる目を、同時に持つことが必要なんだろう。

「疑って信じない」と「無条件に受け入れる」は、柔軟性を問われない。一心不乱に、自分の意志を貫き続けられればいい。心はそんなに使わない。

でも、「信じつつ、疑い、監視すること」は、すごく神経を使う。心がとても疲れる。

-----

普通は、盗まないし、暴力を振るわないので、「最初から思わない」という人がほとんどだろう。

それをする人は「異常」であり、「別の生き物」にうつる。

異常を正常に戻すことはできないと考えてしまう。

だから、排除の方向へ向かう。

-----

もう少し身近な問題を考えてみよう。

娘が小さいころの話。

娘が一人で、自分の歯を磨くのが習慣だった。

「歯磨きしなさい」と言うだけで、しているかどうか、監視することはなかった。

洗い物をしたり、布団を整えたり、支度に忙しかった。

そして、「磨いた？」と聞いて、「磨いた」と言われれば、何の疑いもなく信じていた。

ところが、娘は、実際には歯磨きしてなかった。

「磨いた」と嘘をついていた。

「そんな嘘をつくなんで、この子は異常なのではないか？」とすごくショックを受けた。

でも、何で知ったか忘れたけど、小さい子どもにはよくあることらしい。

「嘘をついてはいけません」と言われても、「嘘」が何なのかが分かってないから、いくら説教しても無駄。

一生懸命言っても聞かせても、全く通じていなかった。

結局、どう解決したのか忘れたけど、なぜだか、母親が仕上げ磨きをすることになったので、だまされることはなくなった。

「子どもとはそういうもので、嘘をつくこともある」と分かっているお母さんなら、「本当？見せてごらん？」とか言って、上手に対処できたかもしれない。

わたしは、不信感を持ってしまって、どうしていいのかわからなくなった。

-----

きちんとやってくれると信じられて、安心していられれば、心は安らか。

しかし、本当かどうか疑って、真偽を確かめて、正しければ褒め、嘘をついたなら叱る態度は、心がとても疲れる。

悪いことを悪いと主張したり、行いを監視したり、褒めたり、叱ったり、評価することは、心をいっぱい使う。

自分のために、自分が好きなことをして、安心して過ごす時間が減るわけだから、信用のおけない相手と付き合うことはとても疲れる。

子どもは、大きくなって、「やってないこと」を「やった」というのは「嘘つき」と意味を知る日が来る。

磨かなくて、虫歯になって、痛い思いをするのは自分だ、と気づけば、そんなごまかしはしなくなる。

でも、小さい間は分からない。

わけのわかんないことをされるから、常に監視してなくてはならない緊張感は、子育てで一番大きな負担だった。

たとえば、何を思ったか、食べかけの細長い飴を耳の中に入れて、とれなくなったりする。

基本、1対1で過ごす。そして、24時間緊張状態が続いているから、神経もたなかった。

-----

うちでそれをする人はいないが、大人になっても、「服を脱ぎ散らかして、洗濯かごに入れない」という人はいる。

それを注意し続けるより、「直らない」とあきらめて、受け入れてしまう人も多いだろう。

「絶対に許せないこと」ではないから、「あきらめて、受け入れる」ができる。

でも、お財布から勝手にお金を抜いたり、殴る蹴るの暴力をふるうことを、あきらめられるだろうか？

お金は、発覚すれば、「返せ」と迫ることができるかもしれない。財布を隠すなどの工夫もするだろうし、再犯は防げるかもしれない。

しかし、暴力を振るわれて、「わたしが悪い」と思って我慢することはどうだろう。

被害を受けている側には、解決する能力がない場合、再犯を防ぐことは難しい。  
第三者が介入しなければ、死ぬまで続くかもしれない。

どっちを守るか問われたら、被害者を守る、と答える人が大半だろう。  
暴力を振るわないことを求める。  
約束が果たされなければ、引き離すことを検討する。

-----

酒や薬物やギャンブルにおぼれることも、「その状態を続けること」は認められない以上、対決する姿勢が問われる。

しかし、依存症を個人がケアすることは難しい。  
更生施設に入ることが求められる。  
ただではないから、誰でも入れるわけではない。  
仮に、払えたとしても、無駄なお金を払わされるわけだから、負担が大きい。

-----

わたしの場合、「注意されること」を考えたら、夜更かしだろうか。

早く寝た方が調子がいいことは分かっているけど、睡眠薬が切れなくて、昼間も眠くて寝てしまうと、一日何もしないまま終わってしまうので、自分で自分を責めてしまう。

そしたら、ゴミだしとかなくて、早起きしなくていい前日には、こうして夜作業することになる。

用事がある時は早く寝て起きているので、そこまで強くとがめられないが、「やめた方がいい」と言われる悪習慣。

-----

基本的に、組織は、ルールを定めて、従うことを前提にしている。

罪を犯せば、罰が与えられる。

償いをすれば、再び、集団の一員に加えられるけれど、過去を知って差別されることは、どう解釈したらいいだろうか。

生まれや育ちで、本人の言動と関係なく否定されたなら、それは差別と言えると思う。

しかし、本人が実際にやった事実を元に否定されたなら、それは差別だろうか？

たとえば、「ずっと暴力を受けていて、耐えかねて逆襲して殺してしまった人」が、罪を償ったなら、「この人は理由もなく殺す人ではない」と信じることができるだろう。

しかし、「むしゃくしゃしたので、とおりすがりの人を刺した人」が、罪を償ったからといって、「二度とやらないだろう」と思えるだろうか？

理由もなく、簡単に人を殺した人を、恐れる気持ちを持つことは、「襲われたら抵抗できない人」なら誰でも感じる不安ではないだろうか。

そして、「関わりを避けたい」と思う。

「その人自身を評価する」ということは、よいことをしてきた人はいいけれど、悪いことをしてきた人は、ずっと悪い評価をされる、という問題が起きる。

「過去」がすごく重くなる。

-----

時代が違うし、創作だけでも、漫画「バカボン」に出てくる登場人物で、「力が強いのをいいことに、働かずに村でプラプラしていた嫌われ者」がいる。

自分より圧倒的に強い相手に出会って、初めて友だちという感覚を持つ。

そして、相手の身の上を心配する。

自分より下に見ていたら、慈悲は生まれない。

力が強いことだけではない。存在そのものが、自分よりでかいと認めた相手に信じて欲しいと思わなければ、改心の気持ちは生まれない。

相手から認められなければ、「信じて、受け入れる」という慈悲の気持ちを示す機会はない。

-----

娘に、悪いことばかりするのび太を叱りつつ、世話を焼くから、「ドラえもんは慈悲深いか？」と聞いたら、「面倒見はいいけど、慈悲はないと思う」と言われた。

そこからツイッターにメモしながら考えて出した答えが、この「存在感」という問題。

たとえば、いじめられている人が、いじている人に対して、「あなたの罪を赦そう」と言っても、逆にバカにされかねない。

「お前にどう思われようが関係ないわ！」と一蹴されそう。

なぜなら、悪いと思ってないから。

悪事ナウだから、通用しない。

将来的に、「あの時は悪いことをした」という後悔の気持ち起きるなら、「被害者から許されたい」という気持ち起きるかもしれない。

それは、対等な人間として認めたということではないだろうか。

下に置いていた相手を、同等にした。

でも、それを慈悲とは言わないだろう。

悪事アフターなら、赦しは通用するが、「慈悲を与える」とまでは言えない。

つまり、上に置いた相手に、赦された時、慈悲を感じるのではないだろうか。

権威があるかどうかより、自分の中の存在の大きさが問題なんだと思う。

----

たとえば、罪を犯した男がいたとしよう。

罪を犯したこと自体は悪いと思っていないが、「この女だけには卑怯なやつだと思われたくない」と思っていて、実際、「罪は憎むが、変わらず接してくれた」なら、「慈悲」を感じないだろうか。

男女が逆になっても、性別が同じでもいい。

「他の誰に何を思われてもいいが、この人だけには信じて欲しい」と思った時、初めて罪を罪と意識するなら、「組織」の力で救済することは無理なのではないだろうか。

大きなパワーを持つ、誰かに、帰依することでしか、「赦し」は、実現しないのかもしれない。

----

2173再構築の中では、「システムに労働力で貢献している人=聖」で、「金銭で貢献している人=俗」で、「システムを悪用して私利私欲を肥やしている人=悪」となるから、「聖なる彼らが国土を守り、子どもを育て、老人を保護しているから、わたしたちは好きなことができるのだ」という気付きが、悔い改めなんだろう。

そして、「金銭を差し出し、受け取ってもらえること」が、慈悲になるのかも。

差し出す金銭がなければ、労働力で払うしかないが、資格がなかったり、40歳以上だと保護区に入れない。サポート労働者も、資格がないとなれない。聖なる存在に許される機会がない。

システムのただ乗りをする、「寄生虫」という自覚を持ちながら、それでもどうすることもできなくて、寄生して生きていくことは、苦しいだろう。

それなら、「わたしが決めたルールじゃない！」と逆らった心のままでいた方が、幸せかもしれない。



ララは、自分が占いで稼いだお金を、生活費と趣味に使ってしまって、システムを維持するために金銭を払っていない。

ロロは、歌手として成功しているから、それなりに支払っている。

ララの父は、商店街の組合員として、決められた金額を払っている。

つまり、ロロがシステムの必要性を感じて、多額の金銭を払っていることを知り、自分はただシステムに寄生しているだけなのを恥ずかしく思って、保護区で区長補佐としてシステムに貢献することを決意する、という流れが生まれる。

ララが、赦されたい相手は、ロロ。だから、そのロロを直接見る機会を失うとしても、恥ずかしくない自分でいたいと願う。